
ラストタイフーン

武上 洵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストタイフーン

【Nコード】

N8871P

【作者名】

武上 湫

【あらすじ】

高宮愛シリーズの完結編です。タイフーンアイとべすと げーむ おぶ ざらいふの設定で続編となります。

―前書き

献辞

かつての新人さんに
そして

日々産まれる新人さん達に

ゴールの無いサッカーをプレイする
彼らの魂に

本作を捧げる

―前書き

最初に、ゲームズフロントで武上溪に来て頂いた読者さんは、バツクする事をお勧めします。さほどの事もない恋愛模様を描いたストーリーです。まず読めない小説です。ご注意ください。

タイフーンアイとべすと げーむ おぶ ざらいふ の背景と設定でストーリー展開します。本作にその説明は有りません。前述の2作をご参照願います。

高宮愛シリーズの完結編となります。女装に関して不快感を感じる方は、読まないで下さい。理解不能な内容です。主題歌として、秦基博さんの「アイを設定してみました。よろしければ、読み始めに聞いてみて下さい。」では、大阪梅田堂島たこ焼き屋たちゆうから物語を始めます…。

2011年1月

武上溪

― 第1話 新人さん

― 第1話 新人さん

高宮愛は、たかみやあいタイフーンアイに入って行く路地を見渡せる。たこ焼きタナチューの店先で、たこ焼きを食べながら店のオバチャンと世間話をしていた。

「でさあ、おかしいのよ……」

愛は、店のオバチャンの視線が動くのを見た。愛は店に向いており、オバチャンは道に向いている。たこ焼きのようじをクワエタまま愛も振り返った。

「あの子まただね。何回目？」

愛は、可愛い丸顔の男性がタイフーンアイの路地を通り過ぎるのを見た。

「4回目だね。一回につき3回通り過ぎて帰ってく。ちょっと多いかな。前回で普通は、入っちゃうんだけどね」

「入るのは自分の意志で？」

「リスクの有る世界だもの。自己責任を取れない人間は、入れちゃ駄目なの」

オバチャンは、2回目の彼を見ながら言った。

「目が大きいし、ショートボブでワンピース着たら結構レベル高いんじゃない？」

愛は、少しイラッとした。それが何なのかは思いつかない。

「愛さんのタイプじゃない？似てるな」

「誰に？」

オバチャンは、ミナミで女装ショップに居た事がある。

「言わなくてもわかるでしょう？彼も最初はあんな感じだった…」
「誰？わかんない」

3回目に男性は、リュックを背負って、愛に背を向けて路地を見ていた。そしてクルリと回って、愛を見た。

澄んだ瞳が愛を捉えた。胸がキュンとなった自分に戸惑いながら、視線を外せない。

「いったい何？この子」

彼は、そのまま愛に向かって歩いてきた。

「すみません。失礼ですが高宮愛先生ですか？」

声も可愛い。

「あっはい。そうです」

「本よませてもらってます。すごく参考にさせてもらってます」

「ありがとう。興味があるの？」

彼は少し黙った。核心にそっと触れたはずだ。

「はい。でも、入れないんです。越えられないんです。越えたら、越える前に戻れないと思うと…」

これだけ素直に自分を言葉にできる女装っ子さんは、初めてだ。彼らは、自分が女の子になりたい欲求を他人に知られる事を最も回避しようとする。

「いい？。ここから先…あの路地の奥は違う世界でも何でもない。いつでも自分の意志で戻って来られるし、本当の線はもつと先だよ。ここまで来たあなたには、逃げ切る事はできないと思う…でも誰もあなたの背中を押す事はできないの。差別を受けたり、職を失った人が居るからね。もつと云うなら、体売ってヤクザに取り込まれたり、暴行されたり。そのリスクを誰も肩代わりは出来ないし、助けてあげる事も出来ない。自己責任の世界なの。冷たいんじゃない、それでそれぞれが身を守るしかないの」

愛は何度も新人さんに言った文句を、フワフワした気分でしゃべる自分に戸惑っていた。

「でも。愛先生は、助けてもらいましたよね？」

「助けられなかった人もいるの。まったく手が出せなかった人もね。突然自殺された事もある。あなたもそうなるかもしれない。だから、背中を押さないの」

彼は、また背中を向けて路地を見た。

「でも。高宮さんが居てくれるんですよね？あの先に…」

「そうね。居るよ」

彼は、振り返らずに歩き始めた。道を越えて、ジャンボカラオケの横を…立ち止まらず。路地の奥突き当たりのビルの中に消えた。

「行ったね。また1人苦勞の種が」

オバチャンは路地を見ながら愛に言った。

「史也を救えなかったから…私はやらなきゃならないの。彼が残した仕事だもの」

「女装っ子さんは、誰にも救えやしないさ。救えるのは、女装っ子さん自身しかない」

「でも、導く事は出来る。道を照らしてあげる事はできる。それは、私にしか出来ない。浜省の歌がある…」

愛は歌った。

「…星がひとつ 空から降りて来てえ あなたの道を照らすのよと」
「きつとそうだね。彼が気づいてくれる事を祈るのみ」

愛は、自分の気持ちを思い出した。史也を始めて意識した時の懐かしいフワフワした気持ちを…。

愛もたこ焼き屋を出て、路地に入って行った。それは、愛の最後の恋の始まりとは気づかず…。

―次話！

―第2話 デジヤヴ

―第2話デジャヴ

―第2話デジャヴ

ゴウンッ

エレベーターは、独特の音を立てて止まった。イヤイヤのように、扉がスピードを変えながら開き、蛍光灯に照らし出された廊下の奥突き当たりに、半開きの窓が見えた。

愛は、タイフーンアイの扉の前に彼がいない事に少し驚いた。新人さんは、最後までためらい続ける。いや、その度合いが小さく気づかないくらい小さくなくても、そのためらいは消えない。彼らは、限りなく女性に近づいて行くが：たとえ本物の女性よりも女性らしくなくても、女性になる事は出来ない事を知ってしまう。それが自殺に至る危険を、意識しなくても本能的に感じるからだ。

愛は、廊下の途中にあるタイフーンアイのドアを開いた。

薄暗い店内に、Tシャツ リーバイスの宮村理彩の姿が見えた。

「あら？愛さん早いですね」

「ちよつとね」

カウンターの一番奥に、彼を見つけた。ビールが置かれているが、細かな泡はグラスの一番上で蓋をして崩れていない。

「何か作ります？」

愛は理彩に顔を戻して、たこ焼きをカウンターに置いた。

「たなちゆうのたこ焼き…良かったらみんなで食べない?」

彼はチラツとたこ焼きを見た。

「名前は有るの?」

理彩は新人さんには慣れている。

「無いなら、仮で付けてあげよか?」

「はい…」

「芸能人で好きな人は?」

「石田エリさんです。って云うか…釣り馬鹿の道子さんが好きです」

理彩はチョット驚いて見せた。

「わかる! いいよね…道子さん。大人だけど超絶カワイイんだもん」

彼は少しニツコリした。愛はその顔に、ドキツとした。

「愛さんは、どうですか?」

彼は真つ直ぐ目を見て来る。

「えっ? そうね…私も好きよ、道子さん」

ニツコリしながら、彼はうなずいた。

「愛さんが好きなら、道子さんにします!」

理彩は横目で愛を見た。

「え〜なに?。どういう事?もしかしてデキちゃってるの?すでに」

愛は理彩をにらんだ。

「…わけないよね。たこ焼きもらうね」

彼が体ごと、こつちを向いた。愛は彼を見て言った。

「道子ちゃんもこつちに来ない?」

素直に丸椅子を降りて、愛の横にチョコンと座った。

身長は愛と同じ位だ。目が悪いのか、顔を寄せて、つま楊枝を親指

と人差し指で摘んで、たこ焼きを突き刺した。

「目は悪いの?」

「近視です。コンタクトは合わなくて…でもまだメガネは慣れないんです」

突き刺したたこ焼きを、目の前に持ってきてしばらく見た後…パク

ツと口に入れた。愛は眉を寄せて彼を見た。

「それは、道子ちゃんのクセ？」

「何がですか？」

「その食べ方…」

「ああ…小さい頃からです。たこ焼きってカワイイじゃないですか。見ちゃいます」

理彩も幽霊を見たような顔をしている。

「あの…気持ち悪いですか？」

愛は、慌てて笑顔を作った。

「ウウウン。そうじゃなくて、そう言う食べ方する人が居てね。チ

ヨット顔も似てて…ゴメンね」

愛はたなちゅうのオバチャンの言葉を思い出した。

「愛さんのタイプじゃない？似てるな〜」

（まさかね。気のせいだ。しつかりしろ愛）

「その人。お二人の顔からすると…死んでます？」

愛は、右手を振って打ち消した。

「ちがうちがう。元気よね〜理彩さん？」

理彩もスマイルを作った。

「…そうそう。今イギリスに単身赴任してるから、会えないけどね。クリスマスカードが来てたから死んでないはずよ」

「ふ〜ん。そうですか」

少し沈黙が流れた。

「ここって、メイクしてもらえますよね？」

彼は話題を変えた。

「隣のビルだね。電話してあげるね。詳しい事は、受付で説明してくれるから…」

理彩は携帯を取り出して、電話を掛け始めた。

「一階に降りて、エレベーターを降りたら、すぐ左だからね」

「愛さん。ここに帰って来ていいですか？」

「かまわないよ」

「戻って来たら、愛さん居ますか？」

「居るよ。いつてらっしやい」

彼はニツコリ笑って、丸椅子を降りるとリュックサックを肩に背負った。

「必ず居て下さい」

彼は右手を振って、出て行った。

沈黙を破ったのは理彩だった。

「驚いた。あの食べ方もだけど、表情まで。右に顔を傾けた時は、金縛りみたいになっちゃった」

「どう思う？」

「どうって…。史也君になんとか似た顔だけど。普段は、感じない。けど、表情とか仕草とか言葉使い？そっくり」

「だね。…私の一番弱いタイプ。好きになっちゃいそう」

理彩は下を向いて言った。

「いいんじゃない？素直になれば。彼は史也君じゃないし。好きなタイプが世の中に、2人いたってだけの事だから」

「本人にとっては、そこまで単純じゃないよ。まいったな…。胸はドキドキしちゃってるし…」

愛は、彼が座っていた丸椅子を見つめた。

―次話！

―第3話ブリリアント ローゼス

ー第3話プリリアント ローゼズ

ー第3話プリリアント ローゼズ

5人程度のベテランさんが入って来て、愛はカウンターの中に入った。街の様子や消息などの情報交換がおしゃべりの中で交わされる。外に出る子は、コーディネートがおかしくないかどうか、愛に聞いてくる。愛は、最近見ない子の消息を質問したりする。

20分くらい過ぎた後、愛は1人に聞いた。

「陽ちゃん。新人さんってどうしてた？」

陽ちゃんは3年目の20才で、ミニスカートが似合うギャル系好きの子だ。

「道子さん？」

「そうそう。トラブってなかった？」

「オーダーフロアで、菊ちゃん困ってた。レンタルなんだから、妥協しなきゃね。でも、妥協しない子は伸びるよね。期待の新人さんじゃない？」

菊ちゃんはヘアメイクのスタッフだ。

「めんどくさがられて、自己嫌悪になるのがほとんどだけど？」

愛はカウンターを出ようとした。その腕を、陽ちゃんがつかんで抑えた。

「翔子さんが付いてたから、愛さんはいいんじゃないかな？」

「なら…大丈夫ね」

翔子さんは30代のベテランさんで、タイフーンアイのリーダー格だ。

「それより愛さん。ブリリアント ローゼズの事聞いてます?」

「十三の女装バーでしょ?先月オープンした」

十三は大阪キタに有る地名だ。

「それが変なんだって」

「変?」

「ママが、東京でも大阪でも知られてないニューハーフさんで…凄い綺麗な人んだけど純女さんかもってウワサだし、奥に部屋があつて、首の太いマッチョな背広が、凄い出入りするんだって」

「筋じゃないの?」

「事務所関係なら、判る人だから、行つた人」

愛は、陽ちゃんをにらんだ。

「ちよつと陽ちゃん…まだ続いているの?あの人はやめなさいって言ったじゃない!」

女装っ子にも売春に関係している人物がいる。当然組関係と繋がりがあある。

「切れてるよ。でも立ち話まで断れないよ。それより、なんか兵隊っぽいつて…背広が」

「近づくのは、やめた方がいいね。みんなは知ってるの?」

「今日話題になつてるから知ると思う」

後ろのドアが開いて、ひし形セミイデイの翔子さんが入ってきた。本人いわく…正確には、セミイデイレングスダイヤモンドシルエツト…。深い青のチェックのトップスにスカート、四角い胸元には、プチネックレスが見えた。その後ろに、うつむき加減のキュートボブが見える。黒地に大きい柄の白の線のチェックが入ったワンピースから出ている膝小僧がカワイイ。リボンの付いたヒールが良く似合っている。入社したばかりのOLさんと言つた感じに見えた。

翔子さんは、さしずめそのお母さんと言った所か…。口には出せないが…と、愛は思った。

翔子さんは、愛の前を2つ開けてもらって、ワンピースの彼女を促した。しかし、動かない。

「どうしたの？道子ちゃん…」

愛は顔を上げたナチュラルメイクに、驚いた。どこを歩いても紛れもない女の子だ。レンタルではなく、自分で服を買うようになれば、女装っ子のアイドルになる…愛は確信すると共に、そのリスクの高さを思った。妬みと恨みに、女装っ子が好きな男達からのアタックに加えて、痴漢の危険すら有る。男に嫉妬が無いと云うのは間違いだ。写真コンテストが行われると、優勝者と入賞者に対して、不満と嫉妬の嵐が吹き荒れる。口を聞かないだとか、無視するなんて事が普通に発生する。

「愛さん…おかしく無いですか？」

道子ちゃんは、おずおずと消えそうな声で言った。この自覚の無さが嫉妬に油を注ぐはずだ。もっとも本人は、人に見られる恥ずかしさの頂点に有る。この恥ずかしさが新人さんの身を守る部分でもある。これが薄れて、楽しくなった瞬間に事故に会う。調子に乗っている時には、危険を察知出来ないからだ。

「そうね…」

ここでしっかり見る事が重要になる。新人さんの信頼を得なければならぬ。聞く耳を持つてくれるかどうか、次の一言で決まる。

「ウィッグは、顔に合ってるね。道子ちゃんは、背が高くないから、それぐらいの長さがベストだね。ワンピースは清楚なイメージでカワイイよ。ヒールもいいね。自分で選んだの？」

「メイクさんが選んでくれました」

「菊ちゃんコーディネートかあ。自分ではどう？」

「なんか…凄い。でも、なんか…もうちょっと…」

「イメージと違う？」

「はい…」

「それはこれから、自分でイメージに近づけて行くんだよ。それから、オドオドし過ぎ。私やメイクさんに見られても平気にならなきゃ。女の子で有る事に、平気じゃない女の子はいないでしょ？」

「はい。頑張ります！」

ニコツと笑って、翔子さんの隣りに座った。周りがその表情に、吸い込まれるように見た。愛は軽いめまいを感じた。

「駄目だ。好きになるー」

そう思いながら、振り払うように顔を振った。

両側から、質問の嵐が道子ちゃんを包んだ。愛はトイレに向かった。手に持っていた携帯がアンジェラ アキの着メロを流す。そのまま店の外に出た。

「はい…高宮です」

言いながら廊下の奥の窓まで歩いて行く。

「山際です。今はタイフーンアイですか？」

「はいそうです。日本に戻られたんですか？」

「いま関空の税関抜けた所ですー」

「どうして関空なんです？セントレアじゃないんですか？」

「いま追ってる件が大阪の十三（ミナミ十三）に繋がってまして…急遽アフガンから行けって事になりました。愛さんにもお会いしたいし、取材の協力もお願ひしたいんですー」

「構いませんけど、今からこちらに？」

「行って大丈夫でしょうか？」

「大丈夫です」

「詳しい事は着いてからと言う事でー」

電話は切れた。

「タイミング悪いよ。正義くん（まさよし）」

電話の相手は、山際正義。フリーのジャーナリストで、世界の紛争地帯を父親と駆け巡っている。数年前に取材されて、その後数回食

事に誘われた。日本に居る時には会ってデートを重ねている。しかし、結婚するイメージが愛には湧かない。正義は、自分でなくても良い気がする。そして、今夜…史也に似た道子ちゃんだ。道子ちゃん、私が守ってあげなきゃと思う。

今回正義に、会ってプロポーズされるかもしれない。

「断れるかな…」

愛は、窓から見える三日月に向かってつぶやいた。

―次話！

―第4話 取材協力

― 第4話取材協力

― 第4話取材協力

店内には、愛のほかに、理彩とチーママの貴ちゃんが残っていた。理彩はカウンターの時の時計を見た。閉店まで20分を針は示している。愛は水の入ったグラスに、右手を添えてポツと見ている。

「まいったなあ…」

40分前に道子ちゃんは、なんの悪気もなく、油断した愛にハグして帰って行ったのだ。

「こっちはドキドキなのに、姉弟みたいに抱きついて…ダメージ大きいよ」

「珍しいよね。隙だらけの愛さん」

理彩は、グラスを洗っている貴ちゃんに同意を求めた。

「どうしたんですか？愛さん？ポーとしてますよ」

貴ちゃんもニューハーフさんだ。ニットのワンピースにボニーテールの美人だ。

「失格だね。こんなフニヤフニヤで」

「大切ですよ。女性は恋しなきゃ。今夜の愛さん…素敵です」

愛は、目を閉じてうつむいた。

「貴ちゃん。ここに居るのは仕事なの…そこで、恋愛してたら仕事になんない」

「仕事の前に、女じゃないですか？。大事にしましょう、出会いは」

「出会いによるわよ」

理彩がストップを掛けようとした瞬間、店の扉が開いた。

振り返った愛が驚いて、思わず言った。

「なんでアフガンからスーツなの？」

山際正義は戸惑って、入口で立ち止まった。理彩もドライにコメントした。

「しかもアルマーニだし…もしかしたらアルマーニが防弾スーツ出したとか？」

貴ちゃんは、グラスを洗うのを止めて、両手で口を押さえて叫んだ。「ワァー正義さんお帰りなさい。ご無事のご帰還ご苦労さまですぺコリと頭を下げた。正義は、扉を閉めながらバツの悪そうに言った。

「ねぎらってくれるのは貴ちゃんだけですか？」

愛はあわてて言った。

「ごめんなさい。お帰りなさい。でも、どうしてスーツ？」

「取材目的の関係です。高級そうな名前のバーなので…」
立っている正義に理彩が言った。

「正義くん座って。何か作る？」

正義は、愛のグラスを見た。

「愛さんと同じのを」

「アフガニスタンから無事に帰って来て、大阪の水道水飲む事ないと思うけど？」

正義は、穏やかでない雰囲気に見た。

「じゃあ…いつものカクテルを…愛さんにも…もう仕事は終わりですよね？」

「アイハイね…私と貴ちゃんもいい？」

「もちろん、どうぞ」

やっと、正義は座った。

「愛さん：大丈夫ですか？。体調が悪そうですね」

「体調は良いけど、疲れてるだけ」

愛は道子ちゃんの事を正義に言えなかった。

「そうですね…じゃあ今夜は、このまま帰ります」

愛は、隣りの正義を見た。

「待つて。取材が有るんでしょ？」

「いや…。愛さんが疲れてるなら止めます」

「駄目よ。仕事はちゃんとしなきゃ…。そんなに長く日本に居られないんじゃない？」

「じゃあ、詳細だけ話します」

正義が語ったのは、だいたいこんな内容だった。

アフガニスタンはタリバンが支配しているが、数年前に事実上アルカイダに乗っ取られたらしい。その為に、アメリカ軍が進駐して戦争になってる。そのタリバンの中に、最近になって和平派が発生した。それが、日本に本拠地を置く謎のグループによって支援を受けている。その謎のグループは、外務省の特殊法人のコントロール下にある。そして、その謎のグループの本拠地を山際親子は突き止めた。

「それが、ブリリアント ローゼズと言うバーらしいんです」

愛が叫んだ。

「十三の…」

正義の目が鋭くなった。

「知ってるんですか？」

「今日、陽ちゃんて言う子が話してくれたばっかりよ！」

正義は、自動的にメモ帳を取り出している。

「それで？」

「店の奥に部屋が有って、首の太い背広がひっきりなしに、出入りしてるって……」

「なるほど……今から行けますかね？」

理彩が答えた。

「朝5時までやってるけど……場所は昔のバイオレットババだから、案内してあげようか？。京子ママは一度挨拶に来たから、うまく繋いであげるよ」

「それは助かります！さすがは理彩ママ。お願いします！」

「じゃあ愛さんも行った方が良いね……」

そう言う理彩に、愛は言った。

「どうして？私が？」

「ジャーナリストの山際です。何ヤバい事してるんですかって言えないでしょ？」

正義が済まなさそうに続けた。

「ニューハーフさんなら知らない人はいない、高宮愛の彼と言う事で、京子ママが警戒するのを防ぐ……と言う訳です」

「わかった。やりましょ。理彩さんと正義さんなら、守ってくれそっだし」

理彩は貴ちゃんを見た。

「貴ちゃん。戻って来ないから、後かたずけ終わったら店閉めて帰って」

「ママ……私も行きたい！」

「ダメ！危ないから。明日8時に電話して。もし出なかったら、警察に行つて事情を話して」

「ええっ〜ヤバすぎですよ〜」

そう文句を言う貴ちゃんを無視して、理彩はカウンターを出た。
3人はタイフーンアイを出て、十三じゅうさんに向かった。

―次話！

―第5話京子ママ

―第5話 京子ママ

―第5話京子ママ

理彩が知り合いの個人タクシーを呼んだ。
十三駅の近くで3人はタクシーを降りて、理彩について行った。理彩は一階建ての木の扉を開けて、愛と正義を促した。

妙なのは、入ってすぐが廊下になっていて2〜3m先にカウンターとボックスが有った。さらに、その先にカーテンの下がった奥の部屋の入口が見える。

京子ママは、タイトスカートの紺のスーツで、髪をアップにした東南アジア系美人と、愛を見た。

店に客の姿は無く、京子ママは笑顔で3人を迎えた。

「理彩ママ!いらっしやーい!。どうぞ〜」

愛は京子ママの目が、素早く正義と愛を見切るのを感じた。それは、水商売のそれではなく、敵味方を識別する必要がある人々の目の動きだった。

「何にします?」

カウンターにおしぼりを置きながら、視線は鋭く動いている。

「ターキーは?」

理彩が言う。

「ありますよ〜水割りでよろしかったです?」

「良いよね?」

愛と正義はうなずいた。
手早くワンフィンガーの水割りが3つカウンターに並んだ。

「こちらの方：失礼ですけど、高宮愛さんですか？」
「そうです」

京子ママは両手を合わせて、喜んだ。

「凄い！お会い出来て嬉しいです。本は全部持ってるんですよ！」
「ありがとうございます」

愛は笑って見せた。

「それで…お隣の方は？」
理彩が答えた。

「愛さんの彼よ！イケメンでしょ？」

「あら？素敵な彼じゃない…おつきあいは長いの？」
正義が答える。

「5年目に入りました」

「あら？じゃあもうそろそろ？」

「正義くんの言葉待ちよね？愛さん？」

「理彩め余計な事を…」

愛は思いながら、正義を盗み見た。

「僕が不甲斐ないんで、まだまだです」

「そんな事関係なしに言っっちゃいなさい！言えない理由なんか一生
なくならないんだから」

正義は笑ってやり過ごした。

「愛さんからプレッシャーかけないと、男は思い切れないよ。元オ
トコのニューハーフが言ってるんだから信じなさい！」

愛は、あいまにうなずいて笑った。正義は、このタイミングで取
材に突入した。

「京子ママさんは、どこの方なんですか？」

「父親の仕事の関係で、3才から25までタイに居たんです。向こ

うで、女の子になってバーで働いてて、日本に戻ってきたんですよ」
「なるほど…タイは本場ですね。京子ママさんは、福嶋哲さんふくしまてつを「ご存知ですか？」

一瞬京子ママは、沈黙したが、すぐに表情を戻した。

「良く知ってます。タイのお店の常連さんで、良くしてもらいました。福嶋さんのお知り合い？」

「はい。2年前に、チベットで仕事をした時にお世話になりました。タイで去年行方不明になった時に、タオユアン村まで知り合いのジャーナリストが消息を突き止めたんですが、その先はまったく駄目です…」

京子ママの顔が柔らかくなつた。警戒心が緩んだ。愛は、正義の腕前に感心した。

「そうですね…探して下さいたんですね。私もタオユアンまで行きました。福嶋さんが何をしてたかはご存知ですか？」

「戦場カメラマンとして、何かを追ってたらしいくらいしか…」

「村長が内緒で教えてくれました」

「えっ！判ったんですか？」

「タオユアン村に、タイ国王暗殺を任務とした、中国特務部隊が潜んでいたんです」

3人とも言葉をなくした。

「福嶋さんは、その部隊の中に、内戦内乱専門のスペシャリストとしてアジアで最も危険な男として知られる…」

正義が詰まった京子ママの後を続けた。

「トウ キンポウ特務大尉…要人暗殺を対立勢力の仕業に見せかけ、内戦内乱を勃発させるのが特徴の工作員…が居るのを発見した？ですか？」

「…それを、村の無線でタイ政府に通報中に、連れ去られたそうです。特務部隊は撤退し、作戦は失敗…中国のタイ掌握は失敗…福嶋さんが生きている可能性は無いとタイ政府に言われました」
愛は思わずつぶやいた。

「ひどい…」

「福嶋さんは、戦場カメラマンですから、危険は承知でした。でも、奥さんとお子さんの事を思うと…涙が出ます」

「その為に、日本に？」

「それも有ります。たまたま支援して下さる方と巡り会えましたので…ごめんなさい！こんな話。話題を変えましょう。…そうだ！タイルのニューハーフ事情に興味有るんじゃない？高宮さん？」

「それはまあ…」

「僕も聞きたいです！」

正義は、目的は達したようで目から鋭さが消えていた。

1時間程して愛は酔っ払っていた。京子ママは、明らかに福嶋さんを愛していたのだ。愛する人の家族を守り、そしてその意志を継ぐ為に、タリバンの和平派と何かをしている。悲壮なまでのけなげさを思うと、愛はつい飲み過ぎた。

気づいた理彩が言った。

「京子ママ。チェックして」

「あら？もう？」

「愛さんがヤバくなってるから…多分足に来てるから、正義くん支えてあげて！」

正義が態勢を整える前に、愛はイスを降りようとした。

正義の腕は間に合わず、愛はふらつきながら歩いて行ってしまった。そこに、入ってきたお客さんとぶつかった。慌てた正義と理彩が愛を支えに行った。

「すみません！ごめんなさい！」

京子ママも交えて、4人が謝りの言葉を交錯させた。お客の男は何故か

「ああ…いや」

とだけ唸って、イスにサツサと座った。また京子ママの目に緊張が

走った。

「じゃあ京子ママ、おやすみなさい！」

愛を両脇で支えて、3人はブリリアント ローゼスを出た。
愛は、タクシーに担ぎ込まれた後…記憶を失った。

―次話！

―第6話焼失の理由

―第6話焼失の理由

―第6話焼失の理由

目を開けると、端が黒く煤けた蛍光灯が見えた。天井も同じように煤けている。首だけ動かすと、ガラステーブルの向こうにソファ―があり、毛布にくるまった理彩が見えた。

―正義くんは、相変わらずかあ

ここがホテルで、正義が隣で寝ている選択肢を、彼は選ばなかったようだ。それはそれで、重たい。選んでくれれば、その人生を受け入れられた自分に、嫌悪感を感じる。

「痛っ……」

体を起こすと、頭に鈍い痛みが走った。タイフーンアイでは、ひと口飲む程度で、まともに飲んだのは久しぶりだった。痛みをこらえながら右手を頭に持つてくると、紙を握っている事に気づいた。

「何？」

紙を開くと、力強い文字が並んでいた。

愛さん お早う御座います。

3時20分にこれを書いています

テレビかラジオでニュースをチェックして下さい。僕のネットワーク情報では…ブリアント ローゼズは焼け落ちました。我々が出てすぐに出火したようです。焼死体は1人で、拳銃を持った男性のようです。京子ママは行方不明との事です。この事件に絡んで、アフガニスタンに戻らなければならなくなりました。理彩さんに、抱

いてあげるのが優しさだと、怒鳴られましたが、命がひとつ掛かる話です。お許し下さい。

「命かぁ。冷たいんじゃない…優し過ぎるんだよ山際正義はぁ」
ソファアの理彩が動いた。

愛は起き上がって、テレビを付けた。理彩は顔だけを出して、愛を見た。火事の映像が映る画面の時計が8:00になった瞬間、着メロが流れた。ホワイトベースの警報音が鳴り響く。理彩の手が毛布から出て、握られた携帯が耳に当てられた。

「うん…おはよ…聞いた…出て1時間くらい後…正義くんにメールで…無事だよ…私のアパート…今起きたとこ…テレビでもやってる、見てる…そう…じゃあ…後で…」

理彩は、電話を切って、ソファアに横座りした。

「手紙よんだ？」

愛はうなずいた。

「かなり説教してやったんだけど、真っ直ぐ過ぎるね正義くんは…」
理彩は覚めない頭をハッキリさせようと天井を見た。

「電話は貴ちゃん？」

「心配してた。まあ納得したみたいだから…」

「何が起こったんだろう。焼け死んだ人って、私がぶつかった人？」
理彩は、焼け跡の映像をジッと見た。

「正義くん的には、ブリリアント ローゼズはあそこだけアフガニスタンに繋がった戦場だったそうよ。詳しい事は、戻れば判るはずだっ…」

「京子ママ…無事で居て欲しい。一途な優しい人だもの」

「そういう人ばかりが巻き込まれて行くんだよきつと。ウチの子達も危ないよ」

「そうだね…」

愛は、映し出された…黒焦げになったブリリアント ローゼズの扉を見て、震えた。

1ヶ月程して、ブリリアント ローゼズの事件は、様々なニュースに押し流されて、話題から消えた。拳銃を持った焼死体の身元不明のまま…。

閉店間際のタイフーンアイで、愛はまた、水のグラスを握っていた。道子ちゃんが隣りでしゃべっている。まだ2ヶ月に満たないが、つま先から頭の先まで、大阪の最先端ファッションに包まれている。そのうち読者モデルにでもなりそうだ。

「…愛さん。この子なんだけど…」
道子ちゃんは、携帯の写メを見せた。同じようなファッションの女の子と道子ちゃんが写っている。

「バービーでバック見てたら、話が合って、お友達になるうって言うから…いいよって事になりました。名前は、水島舞ちゃん。20のOLさん」

「道子ちゃんには、驚かされるね。純女さんのお友達とは…」

「愛さんは…怒りませんか？」

「私が？どうして？」

「舞ちゃんと仲良くして、大丈夫ですか？」

「純女さんのお友達なんて、新人さんなのにレベル高過ぎよ。しかも、舞ちゃんよりセンス良いと来てるし…」

「うん…今度メイクしてあげる約束になってる」
理彩が口を挟んだ。

「恐ろしいよ。道子ちゃんは。セルフメイクマスターしたからね」

「で…相談が有ります」

「何？」

「男だつて、言った方が良いと思います？」

「舞ちゃん気づいてないの？」

「多分：今日スーパー銭湯に入ろって言うから、必死で断ったんです。気づいてたら誘わないですよね？」

「普通の女装っ子さんなら、長く会ってれば男だって判るもんだけど：道子ちゃんだからね。そうね〜親友に成っちゃいそう？」

「悩み事とかバンバン言って来るから、多分：」

「だったら、こんどお店に連れてらっしゃい。言っただ丈夫な子かどうか見てあげる」

「はい。連れてきます。じゃあ：メイクダウンして来ます」

道子ちゃんはイスから降りてドアを開け、そして声を上げた。

アルマーニの正義が外でノブを握っていたのだ。道子ちゃんは体が行っており、正義にぶつかった。

「すいません！大丈夫ですか？」

道子ちゃんは顔を上げて正義を見た。

「私の方こそすいません！あつ：どうも」

道子ちゃんの顔が曇った。正義が愛の交際相手である事を知っているはずだ。それを見た愛は複雑だった。道子ちゃんは自分に好意以上の物を持っているかもしれないと：。

道子ちゃんは、そそくさと出て行った。

「今の子って、例の浜崎道子さん？」

「そう。100年に1人の逸材よ」

「驚いたなあ。あんなにかわいいのに：なんで男に産まれたんだろっ？」

理彩が言った。

「神様だつてミスするって事」

正義は道子ちゃんが居たイスに腰かけた。

「ブリリアント ローゼズで何が有ったか分かりました」
愛も理彩も正義を見た。

「カプールの食堂で、昼飯を食べてたんですが…」

正義の横に、現地人の男が座った。とつさに正義は立ち上がった、男を見た。自爆テロでなくても、ナイフ強盗やゆすりの場合がある。
「山際さん。スープが冷めますよ」

男は日本語で言った。

「…その声は。京子ママ！」

「覚えててもらえたなんて、嬉しいわ」

「どうしたんです！その姿は？」

「簡単に云うと。外務省の紛争地域調査機構が廃止になって、私達は後ろ盾を失ったの」

「アメリカ国務省の圧力で、総理が押し切られたって噂でしたね」

「燃えたお店で、拳銃持って死んだの…CIAのNo.1ヒットマンだって」

「それにしても、間抜けですね？」

「愛さんのおかげよ。愛さんがぶつかつた時、一瞬拳銃のホルダーのベルトが見えたの。それで、CIAが抜いた時カウンターの板越しに射殺できた。その後踏み込んで来た連中の為に、発火装置を作動させて、天井から屋根に逃げ出して、ここに居るわけ。愛さんに会ったら、ありがとって伝えてね」

正義は。京子ママをマジマジと見た。砂塵に汚れた服。ヒゲをたくわえた、日焼けした顔。

「ここで何を？」

「タリバンに入り込んで、和平派と接触到成功した。相手はアルカイダだから、厳しいけど…やって見せる。絶対…」

「京子さん無茶だ！どこかで殺される！やめましょう。すぐにアフガニスタンから出るんです」

京子ママは、髭面をゆがませて笑った。

「無駄よ。それとも、私を引きずってくつもり？」

「どうして？そこまでするんです」

正義は、そこで愛のグラスの水を飲んだ。

「京子ママは…何て言ったの？」

愛は黙っている正義に言った。

「チベットで、福島哲さんと話した時に、僕は同じ質問をしました。どうして？そこまでするんです？。彼は京子ママと同じ事を言いました……」

正義は一時停止ボタンを押したように、止まった。

「…和平も平和も幻想だ。だが、僕にとってこの地球上で、これより魅力的な幻想は無いんだよ」

愛の目から滴がカウンターに落ちた。

「馬鹿だよ。京子ママ。死んじゃったらしょうがないよ」

正義の腕が、愛の肩を抱き寄せた。愛は拒否したかったが、拒否出来なかった。何故なら、ジャーナリストらしからぬ大粒の涙が、正義の目からこぼれ落ちていたからだ。

―次話！

―第7話西堀さん

― 第7話西堀さん

― 第7話西堀さん

タイフーンアイは、カウンターバーだが昼の12時から営業が始まる。カウンターの中には、チーママの貴ちゃんだけが居る。ドアが開いて、男性が入って来た。

「いらつしゃい。どうぞ」

スーツにネクタイの男性は、右足が悪いのかわずかに引きずって、イスに上がった。

「とりあえずビールを…」

「バドワイザーでよろしかったですか？」

「それで…」

男性は店の中を見渡して言った。

「高宮愛さんは？今日は？」

貴ちゃんは、男性を観察した。日に焼けたセールスマンと言った感じに見えた。

「2時くらいって聞いてますけど、お知り合いですか？」

時計は、12時を20分回った所だ。

「岐阜の方でお世話になりました。5年か6年くらいになります。それ以来です」

「出版関係とか？」

「いや。当時はゲームソフト会社に居ました」

「えっ…どのゲーム作ってたんですか？」

逆三角形のツンボリ高いグラスに、バドワイザーを注ぎながら貴ちゃんは聞いた。

「一番有名なのは、クライムズかな。最近だと、PC版ゲルググコックピットだな。一部分に関わっただけだけどね」

貴ちゃんは、グラスをカウンターに置いて興奮した。

「ニューグリに居たんですか！スゴいすごいスゴイ！でも、ゲルググコックピットは今年出たばかりですよね？」

「元のプログラムは、10年前に仲間内で作って有ったんです。あの頃は、6台モニター並べてやってました」

「へえ〜無茶しますね。ヒューズ飛ばなかったですか？」

「もちろん、針金に変えました。怖い物知らずでしたから」

「電線燃えるって噂を聞いてますよ？」

「そついえば…焦げ臭かったかな…」

そこに、愛が入って来た。

「あら？愛さん早いですね？」

「例の舞ちゃんを、道子ちゃんが連れて来るの。1時くらいに…あら？西堀さん。ですよね？」

「高宮先生お久しぶりです。岐大病院以来ですね！」

「びつくり！どうしてここに？」

「能登島にタイフーンアイの話聞いてましてね。梅田に来たんで寄ってみました。高宮先生座って下さい」

愛は、グラスに水をもらって西堀の横に座った。

「美花にレース関係の仕事に変わったって聞きましたけど？」

「ええ。今もやってます」

「足はもう大丈夫ですか？」

「完全には戻りませんが、日常生活に支障はありません」

「そうですか…今でも思い出すとゾツとします」

「そうですか？当時は平気に見えましたよ？」

「詳しい話を知らなかったからですよ。後から聞いて、震えました」
貴ちゃんは、聞いてない振りをしている。

「実は。来年F1に参戦するんです」

貴ちゃんが反応した。

「それって、トモホリレーシングチーム！」

「よくご存知で？」

「知ってますよ！ドライバー大友康洋のトモと、西堀監督のホリでホリトモ…西堀監督なんですか！。握手して下さい！」

貴ちゃんの右手を、西堀は苦笑いしながら握った。

「貴ちゃん。有名な西堀さん？」

「F3で4連覇ですよ！しかも、プライベートチームで！F1関係者がアジアで最も危険な男って呼んでる人なんですよ！西堀監督は！」

「危険なんですか西堀さん？」

西堀は笑いながら答えた。

「マスコミが騒いだけですよ。実際は、やれるもんならやってみるって所です。外から見る程簡単じゃ有りません。年間最低10億必要な世界です」

「最低？ですか？」

「表彰台に登るつもりなら、それプラスつき込めるだけ幾らでもです」

「そんなお金どうやって集めるんですか？」

「すべてのレースマンの夢は、フォーミュラー1で1位になる事です。同じ夢を見てもらうよう説得し続けます。キリスト教の伝道師みたいなもんです」

「来年参戦って事は、集まったんですね！」

「ドライバーが普通じゃないのが、武器になりました。性能で劣る車両で勝つ男です。互角ならって誰でも思います」

西堀は遠くを見つめる目をした。

「イギリスのシルバーストーンを拠点に活動を始めます。鈴鹿には来ますがプライベートな時間は無いと思います」
そこで西堀は黙った。

「今日ここに来られたのは？」

「あの時のお礼を言っただけです。ありがとうございます。それから、鈴鹿でF1が一年に一度開催されます。ぜひピットにお越し下さい。パスを用意しておきます。ゲートで名前を言って下さい。通れるようにしておきます。知り合いの方も一緒に歓迎します」
貴ちゃんが興奮した。

「すごい！愛さん。わたし絶対連れてって下さいね！」

「私は詳しくないから貴ちゃんが必要だね……」

愛は西堀を見た。バドワイザーはすっかり気が抜けていた。それを西堀は一気に飲み干した。愛は驚いて目を見開いた。西堀は、グラスを膝に置いた。

「じゃあ行きます！幾らです？」

「あの……」

愛を遮るように、貴ちゃんが割り込んだ。

「私のおごりで！す！鈴鹿絶対応援に行きますから！」

「貴ちゃん」

「愛さん……チケット幾らすると思ってるんですか？しかも、ピットですよ！。西堀さん行っちゃって行っちゃって！」

西堀はせき立てられて椅子を降り、苦笑いしながらドアを開けた。振り返った顔に、寂しそうな笑顔が見えた。

「待ってます……」

西堀はドアを閉じた。

愛は、急いで西堀を追う為に、椅子を降りた。そこに、道子ちゃんが入って来た。

「道子ちゃん！ごめん！ちょっと待ってて！」

愛は後ろに居た舞ちゃんとおぼしき女の子の横をすり抜けた。

エレベーターは閉まる所だった。愛は、階段を駆け降りる。たこ焼き屋の前で追いついた。

「西堀さん！待って下さい」

黙って、西堀は振り返った。

「西堀さん。どう言う事でしよう？」

「来年。鈴鹿に来た時には、高宮先生を受け入れる状況になります。その時に、求婚します。返事を用意しておいて下さい」

「そんな西堀さん…」

「はじめです。新しい世界に飛び込む為の。過去に忘れ物を置いておくと、気持ちに迷いが出ます。F1で迷えば、命に関わる。何も言わずに行かせて下さい。来年の鈴鹿まで。お願いします」

愛は、それで何も言えなくなった。

揚子江ラーメンの角に、後ろ姿が消えた。

「はじめか…。私は、つけるはじめが増えたね」

愛は、ため息をつきながらティーンアイに戻って来た。

「愛さん！まさかビール代払わせたんですか？」

貴ちゃんは怒っていた。

「違うよ。まさかの展開で、ノックアウトされた」

「どう言う事です？」

道子ちゃんと舞ちゃんも不思議そうな顔を見た。

「聞かないで。道子ちゃんのお友達が困ってるから」

丸顔のギャルが顔を振った。

「わたしは全然大丈夫です。席はずします」

椅子を降りようとした。

「待って。座ってて。貴ちゃん質疑応答はお店が終わってからね」
不満そうだが貴ちゃんはうなずいた。

「バタバタしてごめんなさい。あらためて、高宮愛です」
舞ちゃんに、名刺を差し出した。

「どうも。水島舞です」

舞ちゃんは、丁寧に両手で名刺を受け取った。

「やっぱりあの高宮愛さんなんですネ…テレビで見た事が有ります」
「そう。知ってもらって良かった」

「女装さんて初めてなんです。ちょっとドキドキしてます」

知らない振りなのか天然なのか…愛は判断できなかつた。

「普通に女の子だから、心配いらぬのよ。ここには、危ない人はいないから」

「危ない人もいますか？」

「女装つ子の振りして、女の子に近づくと偽物がいるの。ひとりで近づくのは危険だよ。見分けがつかないから」

「そうなんだ。ねえ道子ちゃん。そういうのに会った？」

「いるよ。センス悪いから判るけどね」

「ふん。おいしいねっカクテル」

舞ちゃんは、道子ちゃんの目をじっと見ている。

「舞ちゃんは道子ちゃんが好きなの？」

「大好きです！すごく優しいし、リードしてくれるし、悩みとか聞いてくれるし。恋人です。完全に。わたしレズとかじゃないけど…道子ちゃんは好き。気持ち悪い？こういうの？」

「嬉しいけど…」

「ビックリするよね。だって女の子どうしなんだもん」

愛は、舞ちゃんが真剣に恋している事を確信した。

「でもウソじゃないから。だから…道子ちゃん。道子ちゃんの彼女にして」

愛に軽くめまいが襲った。

「すごく嬉しいよ。でもね」

「でも？」

「わたしね。愛さんも好きなの。先に愛さんに会ったから…でも、愛さんには彼氏がいて、片思いだけど」

愛はさらにめまいを感じながら、舞ちゃんの憎悪に満ちた視線を感じた。

「愛さん。道子ちゃんを惑わすのはやめて下さい」

「舞ちゃん。誤解よ落ち着いて」

「どう誤解なんですか？道子ちゃんは、渡しませんよ」

完全に、道子ちゃんに告白された上に、三角関係が発生した。モテ期が来たのはいいが…修羅場まで来てしまった。

救援は無い…。

―次話！

―第8話喧嘩別れ

―第8話喧嘩別れ

―第8話喧嘩別れ

耐えられない沈黙を愛が破った。

「ごめんね。惑わして…道子ちゃんは、舞ちゃんに任せるから…お願いね！」

愛はニツコリ道子ちゃんに微笑みかけて、立ち上がった。見返す道子ちゃんは、言葉が出ない。舞ちゃんは顔を背けている。立ち上がろうとする道子ちゃんの腕は、しっかりとつかまれていた。

愛は、廊下に出て突き当たりの窓から月を見上げた。

―うかつだな。情けない

道子ちゃんに恋されて、自分の気持ちも悟られている。しかも、道子ちゃんの気持ちを嬉しい自分がある。

―許されない。プロだから

「何やってんの？お月見？三日月だよ？」

愛は驚いて振り返った。黒いTシャツにリーバイスの理彩ママが腰に手を当てて立っていた。

「ちよつとあつてね…」

「珍しいね。プロ根性の塊の高宮愛が？何か有るとは？」

「今日は、帰ります。詳しくは貴ちゃんに聞いて」

「お次は職場放棄？。まあ雇ってる訳じゃないけど…よければ、メイクフロアのスタッフルームに居るってのも有るけど？」

愛はしばらく沈黙した。

「間が必要だと思う。気持ちはありがたいけど…岐阜に戻ります」

「じゃあ無理に引き留めない。貴ちゃんに聞いて、メールするわね」

「ありがとう。じゃあ」

理彩ママは動かず愛の後ろ姿を見ていた。

「さて。事件は現場を見よだね」

理彩ママは重いドアを開けた。

地下鉄御堂筋線で、新大阪のホームに降りた所で、手嶋葵のテルーの歌が鳴った。愛はピンクのナルカミーチエから携帯を取り出した。「30分か。理彩さんにしては、時間かかったね…」

: Message

まだ新大阪駅なら、千成り瓢箪の看板に居て！。2人が謝りに行くから！

地下鉄御堂筋線の改札を抜けて、右手の階段を登ると、駅の正面に出る。そこに豊臣秀吉の馬印が有る。駅は工事中で撤去されており、代わりに看板が有る。

愛は携帯を閉じて、階段を登り看板の前を通り過ぎようとした。

その左手を誰かがつかんだ。

「ちよつと大人気ないんじゃない？」

理彩の怒った顔が愛を睨んだ。

「後ろ注意してたのに…探偵でも食べて行けそうね」

「待ってよ。全然愛さんらしくない。どうしちゃった？」

「知ってるくせに。全部！」

愛は理彩の手を振りほどいた。

「もちろん！二度と現れないはずの白馬の王子様が現れた！理性はブレーキを掛けているのに、気持ちも体も止まらないから、ハンドルきつて、新幹線に向かって逃げ出したんでしょ？」

「それを止めるニューハーフの意図は何？」

「あなたが」

「あなたが？」

「みんな、あなたが大事な人だから。あなたにも幸せになって欲しいと思ってるからよ」

「わたしが幸せになったとして。わたしが道子ちゃんを幸せに出来ると思う？」

「それは…」

「わたしは、道子ちゃんだけを見て生きられない。次々と路地に入ってくる新人さん達の道を照らさなきゃならない。舞ちゃんは道子ちゃんだけを見て生きられる。間違いなく、道子ちゃんは幸せになれる。違う？」

「あの2人が上手く行くかどうかなんて、わからないでしょ？」

「行く。舞ちゃんは、道子ちゃんの性別なんてどうでもいい。彼がプレデターでもエイリアンでも何の障害にもならない」

「まあ完全にベタ惚れしてるのは間違いないけど…とにかく、謝罪だけはさせてあげてよ」

愛は黙る事で同意した。

15分程して、2人が走って来た。

愛の前で止まると同時に90度頭を下げた。

「愛さん。失礼な事をしました。すいませんでした。許して下さい」
声を揃えているのは、練習してきたのだろう。まるで、先生と生徒のようだ。

「頭をあげて。2人とも」

上がってきた顔には、上目使いのおそろおそろの表情が有った。

「2人とも、自分が正しいと思う事を貫いただけ。謝る必要も無いけど、謝ってくれた事をうれしく思うわ。ひとつアドバイスするなら……」

道子ちゃんがうなづいた。

「正しいと思う事でも、悲劇につながる事が有る。そう思ったなら、我慢して引くのが大人よ」

「だから…愛さんは引こうとしてるんですか？」

「道子ちゃんは？どう考えるの？」

「判りません。未来がどうなるかなんて…決まってる訳じゃないでしょ？」

愛はいったん目を閉じてから、道子ちゃんと舞ちゃんを見た。

「そう思うなら。舞ちゃんにもチャンスをあげなさい！。未来は決まってるんでしょ？」

「……」

愛は、2人の肩を両手で叩いた。

「頑張れ！2人とも！最高の未来をつかみなさい！」

愛は、困惑している2人を見て楽しくなった。まるで昔の自分と史也に説教しているようだった。

そのまま愛は、新幹線の券売機に向かって歩き出した。振り返らなくても、2人と理彩が自分を見送るしかない事はわかっていた。

切符を買って、ホームに上がると携帯が歌った。

： M e s s a g e

未来は決まっていなくても…でも分かっても逃げられない未来もあるのよ。高宮先生。

「それでも、あらがってみるのが人間ですよ…宮村先生とっ」
愛は、送信し終わると携帯の電源を切った。見上げると、看板の中から、プロゴルファアの青木功が奥さんを背負って笑っていた。こんな風に笑う為に、人は数え切れないハードルを跳び続ける。いや、跳び続けるからこそ2人で笑える。愛はそう思った。

―次話！

―第9話宮村理彩

― 第9話 宮村理彩

― 第9話 宮村理彩

カウンターはすべて埋まっっていて、愛はカウンターの中に入っている。愛から一番遠い席に道子ちゃんと舞ちゃんが座っており、店内は女装っ子の話声で溢れていた。

理彩は、忙しく動きながら目の前の男と話していた。

「理彩ママ。彼氏は居んの？」

男は女装子ではない。しかし、女性よりニューハーフが好きな人物だ。

「え〜口説いてるの？ここはハッテン場じゃないよ？」

ハッテン場は女装子と男性の出会いの場になっている。大阪の繁華街のほとんどに有り、目印が有る訳ではない。しかし、そこに居る女装子は自動的に男が欲しいとして認識される。知らない新人さんがトラブルになる場所のひとつだ。

「そんな意味ちゃうよ。纯粹にやな〜理彩キレイや思うただけや」
女装子は意外と大阪府の外から来る人が多い。関西弁は店内ではあまり聞く事が無い。

「ありがとう。ビールおごろうか？」

「酒より理彩に酔ってるのや」

「できればお酒の方が助かるけど？」

「駄目や。もう酒なんて効かへん。彼氏にしてくれや」

「その程度の口説き文句じゃあ落ちる訳にはいかないわね。もう少し腕磨いてね！」

「理彩くテクニクやのうて、俺のまごころを見てくれ」

「真心ねくそれじゃあ私が酔えないじゃない。自分だけ酔ってればいい人なの？」

「負けたわ。理彩ママにはかなわんわ」

首を振っている男の隣に座っている翔子さんが声を掛けた。

「理彩ママはね。心に決めた人がいるのよ。長年見てるけど、まず口説けた男はいないよ」

「そうかく待たせるだけの悪い男に捕まってもうとるんやな…理彩ママっいつか助け出してやるさかい待っとけや。腕磨いてくる。勘定してくれ」

男は金を払うと出て行った。

「どこで腕磨いてくるんだろうね？」

「六甲山にでも山籠りするんじゃない？」

「遭難して笑わせてくれるかもよ？」

理彩はこらえきれずに笑った。バンドのボーカルっぽいルックスの彼女が笑うと、ドキツとする程キュートだ。

翔子は、理彩がニューハーフになる前から知っている。まだニューハーフと言う言葉はなく、おかまと言う言葉と、男らしくしるという言葉が吹き荒れていた。彼女は幼くしてその中で耐えていた。

「それで？彼氏はどうなの？」

「えく翔子さんまで口説いてくれるんですか？」

「まさか！おなべの奥さんと子供を捨てるガッツはないよ」

翔子はチラリと理彩の目が愛を捉えるのを見逃さなかった。

「なんだかモテモテで…ドラフト3位って感じ」

「感心しないね。移籍するのが利口だよ」
理彩は呼ばれて、微笑しながら離れて行った。

愛が翔子さんのグラスを見て近づいて来た。

「翔子さん。今日は進まないですね」

半分くらいのグラスにバドワイザーをつぎたす。

「純女さんが入ってるからね。さっきは理彩ママにアタック掛かってたし…」

「舞ちゃん？心配ないと思うけど？なにか気掛かりが有る？」

翔子さんはグラスを、右手でそつと触れた。

「勘ってない？なんか有る…。みたいな」

「有る…今の所わたしは感じないけど？」

愛は店内を見渡した。

そのまま店はラストオーダーが掛かって、理彩ママと愛、心配気な翔子さんが残った。

「無事に何事も無くて良かった」
愛はホツとして言った。

「何が？」

「翔子さんのノセタラダマスの大予言」

理彩は翔子さんを見た。

「翔子さん。こんどは、いつ世界が滅亡するの？」

翔子さんは笑っていない。

「帰り道気をつけて…ううん送るよアパートまで」

「嬉しいけどイザとなれば野郎だよ？送るなら愛さんを送ってあげて」

そう言った後ドアが開いた。

「もう終わりました。ごめんなさい…徳さん何か？」

背広を着た初老の男が入口から店内を覗き込むように立った。

「理彩ママ。こんな奴見いへんかったか？」

男はカラーコピーを取り出して、右手でぶら下げた。

「さっきの！」

理彩と翔子さんが同時に叫んだ。

「来たんか？何時頃や」

「9時くらいに来て、10時には帰りました」

男はシステム手帳を取り出して、メモした。

「誰か口説かれへんかったか？」

「私が口説かれました」

「そうか。こいつなニューハーフキラー言うて、殺人鬼や。日本人なんやけど、ニューヨークで三人殺りよって国際指名手配されとる。三人ともオカマでな、殺される前に口説かれとんのか。上手い事逃亡して、偽パスポートで関空の税関抜けよった。理彩ママ待ち伏せされとるで。応援呼ぶさかい待ってくれ」

男は無線を取り出して、どこかと通信した。

「せや。梅田堂島呉羽ビルディング4の3タイフーンアイや。星がママ口説きよった。待ち伏せとる。応援頼む」

無線を切ると男は、入口のドアを開け放った。

「理彩ママ悪いけど協力したってくれ。ケガはさせへんさかい」
愛は恐る恐る聞いた。

「刑事さんですか？」

「せや。手帳見るか？」

「別にいいです」

「お姉ちゃんは、本物やな…最近判らんのが増えてどうもならんわ」

理彩ママが男の素性を説明した。

「ママシの徳さんって言つて、売春関係の有名な刑事さん。若い頃は捜査一課のエースだったんだけど…ちょっとやつちやつて、外されてね」

「若気のいたりや。でも、キレイなオカマさんに囲まれる職場や。陰気な殺人犯より華が有つてええわ」

しばらくして、5人の若い刑事がドカドカと入って来た。

「ご苦労さん。あんたがママか？」

翔子さんに言った。徳さんが訂正する。

「ちやう。そつちの黒シャツや」

「そうか？じゃあ協力してもらうけどええか？」

若い刑事はチラツと徳さんを見た。

「あゝ徳さんはもうええで、あとやつとくさかい。それで理彩ママやな名前」

徳さんは黙つて出て行くとした。瞬間、理彩の目が鋭くなるのを愛は見た。

「待つて。あなたは誰？名乗りもせず失礼じゃないですか？」

「なんやめんどくさいな。大阪府警の藤城や。話は徳さんに聞いとるやろ？」

警察手帳の表紙が理彩の鼻先に突き付けられた。

「私が協力すると言つたのは、大阪府警でも藤城刑事でもありません。岸谷徳三郎警部補です」

藤城刑事は理彩を黙つて睨み付けた。

「そんな目力で、よく刑事が勤まりますね」

「お互い様や。刑事にたてついて…よく飲み屋が続けられるな？」

「刑事にたてついた事なんかはないよ。刑事つてのは徳さんのようなレベルの警察官を言うの」

「なら俺達は何や言うねん？」

「岡っ引きだね」

後ろの4人がいろめき立った。

藤城刑事はフツと強面を崩して笑うと…手で後ろを制した。

「時間が無い。本多あ！岸谷警部補殿を呼んで来い！」

1人が走り去った。

「宮村理彩か…ええオカマちゃんやな。俺の好みや。岡っ引きにはお似合いや」

徳さんが迷惑そうな顔で現れた。

「岸谷警部補。理彩ママのご指名や。協力するんは、徳さんだけやそうや。指揮して下さい」

徳さんの顔が締まった。ちいさく…おおきに…と唇が動いた。

「よし。配置は…」

徳さんは別人になって、采配し始めた。

「5分後に配置が完了する。5分後にいつものルートで帰ってくれ。3人で出て、途中で別れて理彩ママが1人になるように。ほなら、自分も配置につくさかい行くで！」

店はまた3人になった。

「根拠ないけど、大丈夫だって思えるのは何？」

愛は店の外に出ながら言った。

「そういうのを確信って云うのよ。本物が発する光の名前」

理彩は穏やかな顔で言った。そして翔子さんが締めくくった。

「ちよつと言い方が臭いけど、良いかもね」

愛は…理彩の徳さんに対する優しさに…異性に対する愛情が湧くのを感じて戸惑った。

次話！

- 第10話岸谷警部補

- 第10話 岸谷警部補

- 第10話 岸谷警部補

理彩のアパートは店から歩いて10分ほどの所に有る。愛と翔子さんは梅田の御堂筋線に向かう為に、途中で別れた。

藤城刑事も徳さんも姿は見えない。午前1時でも人通りは有り、車もガンガン走っている。さらに、道端から酔っ払いが声を掛けてくる。

「理彩ママ終わりかあ〜もう一杯行こうやあ〜」

「ジョーさん。もう寝て。でないとジョーさんの人生が終わっちゃうよ〜」

「人生はお釈迦様が終わらすのや! 酒では終わらん! やから呑むのや!」

「きつとお釈迦様は忘れとるんやな! ジョーさんの人生終わらすの。気付かれんようにしいや」

「そうか! 俺は不死身やな」

通り過ぎる後ろから大きな笑い声が響いた。

こんな賑やかな帰り道で、殺人なんて複雑な作業をやれるとは思えなかった。

理彩は、この先の串焼き屋の前で時々起きる事に気付いた。開けっ放しの店から、営業が終わっても居座っている常連の1人が、理彩に飛び付いてくるのだ。理彩は手前で右に折れて、裏に回った。

店の裏口は閉まっっていて、面倒は起こらないと理彩は思った。

しかし。厨房の窓が開いていて、満面の笑顔で顔をくしゃくしゃにした常連客が窓枠に座っていた。

「ダメッ！」

と言う制止も虚しく

「理彩っ〜！」

と言う常連客の叫び声を合図に、理彩は後ろに引つ張られて倒され、音も無く現れた藤城刑事に、見事なキレキレの逮捕術で常連客はアスファルトに叩きつけられた。見ると、ネジ拳げられた右手に手錠がすでに掛かっている。

「午前1時25分確保！」

と時計を見ながら言っている藤城刑事に、集まってきた刑事が言う。

「藤城さん…違います！」

「何が？時計がか？」

「星じゃありません。顔が違います」

「じゃあ誰なんだ？なんで飛び付いて来た？」

道に倒れたまま理彩は説明した。

「50過ぎのいい親父が夜毎なにやってるんだ！正気とは思えん」
藤城刑事は怒鳴りながら手錠を外した。

串焼き屋の店主と仲間が出て来て、勘弁して下さいの大合唱になってしまった。

「クソッ！囿捜査は失敗だ！この町はどうかしてる！とにかく、アパートまで同行する」

理彩は藤城刑事ら5人と、アパートの近くまで来た。

「徳さんが居ないね。どこに居るんだろ？」

藤城刑事が鼻を鳴らした。

「どつちにしる犯人は気付いて逃げたはずだ。念の為に、朝まで張り込む。施錠を確認して寝てくれ」

刑事達はまた散って消えた。

理彩は階段を上がって、部屋の鍵を回した。ドアを開けようとする
と、また後ろに引っ張られて倒された。

「殺される！」

と頭の中で声がした。しかし、何故か悲鳴が出ない。

しかし、引っ張った犯人は理彩をすり抜けて開いた扉に飛び込んで
行った。

ドンドン

と云う音の後…揉み合う音が響いた。さらに、物が落ちて割れる音
が続く……。

「藤城さんっ！中っ中っ部屋の中っ！」

やっと声が出た。

バタバタと靴音がして、5人の刑事が理彩の部屋に殺到して消える
と、徳さんのシワガレた声が聞こえた。

・確保！時間は…クソッ時計壊しやがった

そして、血まみれのナイフを握った血まみれの徳さんが、4人に運
ばれて出て来た。

「救急車じゃ間に合わん！パトカーを3分で回せ！応急処置は俺が
する！」

運んでいる1人が無線に怒鳴りながら走り去った。

その足音に重なって、パトカーのサイレンが近づいて来る。理彩は
背中を廊下に打ち付けていた。身体が痛みで起こせない。

しばらく痛みに耐えていると藤城刑事の声がした。

「理彩ママ。大丈夫か？」

「背中が痛くて、起きれない」

「生きてるだけで、丸儲けや。徳さんケツコウ深手や。助かるかどうか五分五分やで」

「藤城さんは？」

「せっかくの背広が真っ赤やけど、徳さんのおかげで擦り傷ひとつ無しや。あのオッサン凄いわ。理彩ママの云う通り、俺は岡っ引きやった」

「それに気付いたんなら、もう岡っ引きやない。立派な警官や」

「えらい上から目線やけど、おおきに言っとくわ……」

理彩は何とか首を上げた。返り血を浴びた藤城刑事が、ニューハーフキラーの上に馬乗りになっていた。

「最高やね。カメラがあれば写真に残したいわ」

「やめてくれ。こんな血まみれの写真、誰が見たがるねん」

「そやな…年取って行き詰まった時に、きつと背中を押してくれと思うよ」

藤城刑事は小さく笑って、携帯を取り出した。そして、理彩に投げた。理彩は携帯をキャッチすると藤城刑事とニューハーフキラーを撮った。

―次話！

―第11話道頓堀川

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8871p/>

ラストタイフーン

2011年7月24日23時21分発行